
STRIKE WITCHES ~ 泣いた黒豹、黒兎 ~

awasiki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

STRIKE WITCHES 泣いた黒豹、黒鬼

【Nコード】

N2191Q

【作者名】

awasiki

【あらすじ】

ある晴れた午後。

芳佳とシャーリーは、昼寝をするルッキーニを探すいつもの平穩を暮らしていた

しかしある朝サーニヤが基地内で襲撃されたことから、第501統合戦闘航空団は大きな危機を迎える

この作品は「STRIKE WITCHES」の二次創作です

時系列としては、
STRIKE
WITCHES 2 第七話後、第八
話前になります

暖かな日差しが辺りを照らし、穏やかに風が流れる。

葉が奏でる歌は心地よく、ぽかぽかとした温度は睡魔を呼ぶ。

柔らかなクッションはそれだけで幸せを生み出し、フランチエス・ルツキーニは太い幹の上で寝息を立て始めた。

涎を垂らしながら昼寝をする姿は幸せそうで、それはいつもの第501統合戦闘航空団の有様だった。

「ルツキーニちゃん。お昼御飯だよ？」

宮藤芳佳は少し困りながら、基地の中を歩き回っていた。

いつものように隊員全員分のお昼ご飯を作ったのだが、いつもは一番にやってくるルツキーニの姿が見えない。

それが少し気になって、芳佳はリネット・ビショップに厨房を任せてルツキーニを探し回っていた。

「ルツキーニちゃん？」

部屋には当然のようにおらず、次に芳佳が探しに来たのはストライカーユニットを格納しているハンガーへとやって来ていた。

「お？宮藤。どうかしたか？」

芳佳の声に反応して現れたのは、スパナを片手に持ち、頬に油を付けたシャーロット・E・イエーガーだった。

「あつ。シャーリーさん。ルツキーニちゃん見ませんでしたか？」

「ルツキーニか？見てないな」

シャーリーは道具箱にスパナを仕舞い、肩にかけたタオルで顔を拭く。あつという間にタオルが真っ黒に染まっていく。

「でもルツキー二なら、多分あそこじゃないのか？」

「えっ？どこですか？」

ルツキー二は基地の中に大量の秘密基地を作っている。百を越えると言われているその秘密基地の内、いまルツキー二がどの基地にいるのか、シャーリーはそれが分かるという。

「こんだけ良い天気だからな。きっと外のあるところだな」

宮藤にはどこの事を言っているか分からないが、シャーリーにはどこにルツキー二がいるかを確信しているらしい。迷いなく歩く足取りに、芳佳は大人しく付いていった。

ハンガーを抜けて、基地の裏手に出る。そこから少し生い茂っている林の中にシャーリーは迷うことなく入っていく。

「ほら。そこだよ」

突然足を止めてシャーリーは真上を指差す。芳佳が指の方を見ると、見慣れた青と白のストライプのズボンとそこからだらり伸びた両足が見えた。

「ルツキー二ちゃん！ご飯だよ！」

芳佳が大声で呼びかけるが、ルツキー二は木の幹に引っ掛かった状態で寝ているらしく芳佳の声は届かない。

「寝てるみたいだな。仕方ない起こすか」

そういつてシャーリーはルツキー二の寝る木に手をかける。そのまま簡単に登っていく。

ルツキー二一人分の体重を支える木はかなり太く頑丈で、シャーリーが乗ってもびくともしない。

「おい、起きろ。ルツキー二」

声を出してシャーリーはルツキー二を揺すろうとするが、そこでルツキー二の腰の上に乗る真つ黒な蛇に気が付いた。

今にもルツキー二に噛みつきそうな蛇。シャーリーはその姿を確認するや、臆することなく素早く手を伸ばした。どちらが早いのか。

「させるかっ！」

シャーリーの右手は正確に蛇の胴体を掴んだ。しかし不安定な体勢

のため、その勢いでシャーリーは木の上から転がり落ちた。

ドシンッ――

とシャーリーは地面を揺らしながら尻もちをついた。その頭には、木の葉と枝が付いている。

「痛てて」

「シャーリーさん。大丈夫ですか？」

随分と勢いよく落ちたようで、打ち身したかもしれない。芳佳は立ち上がるうとするシャーリーに近寄る。

「シャーリー。右手、血出てる！」

芳佳が近寄ると同時に、真上からルツキー二の声が届いた。そのまま器用にルツキー二は体を反転させて着地する。

落ちた時に蛇が暴れて逃げたのか、シャーリーの右の空手には二つの穴が開き、そこから血が流れている。

「ん？おお、ホントだ」

大した怪我ではないのか、能天気に関口を見るシャーリー。そんなシャーリーに芳佳は近づいて右手を取る。

芳佳は傷口に手を当てて、魔力を送り始めた。

ぴょこん、と頭から豆芝の耳が生えシャーリーの腕を青い魔力が包む。見る見る内、シャーリーの傷口は塞がっていく。しかし、蛇が毒をもっていたのか、傷口は完全には塞がらない。

「シャーリーさん、蛇が毒があつたみたいです」

出血を促す毒らしく、傷口を塞ぐのを遅らせるものらしい。治癒な方は効かないが、つまりは毒で体調が悪くなったりはしないだろう。

「一応、医務室で見てもらってくださいね」

「ん。わかった」

そう言つてシャーリーは立ち上がる。そこでシャーリーのお腹とルツキー二のお腹が同時に鳴った。

あまりのタイミングの良さに、シャーリーとルツキー二は互いを見つめ、芳佳はその様子に噴き出して笑った。

「ねえ、芳佳。お昼ごはんなに？」

ルツキー二の質問に、芳佳は楽しげに嬉しげに答えた。その楽しげな雰囲気、誰もルツキー二の脇腹に二つの穴が空き、血が流れ出ていることに気がつかなかった。

01（後書き）

まだ、平穏な日常です

スト魔女のキャラは個性が強く、書いていて楽しくなります

今回は、最近自分がハマり始めたシャツキー二にスポットを当てて書いています

「ん？シャーリー。右手どうかしたのか」

ストライカーユニットを穿いての空中での編隊訓練。その時、坂本美緒はシャーリーの右手に巻かれた包帯に気が付いた。

「ああ、さっき木から落ちた時にちよつとな」

シャーリーの元気ないいつもの様子を見る限り、それほど大きな怪我という訳ではないらしい。訓練に支障はないだろう。

「調子が悪ければすぐに言え」

「わかったよ。少佐」

美緒の言葉に頷くシャーリー。それを確認して美緒は少し高く飛んだ。

今回試すのは、宮藤とゲルトルト・バルクホルンのエレメントだ。美緒の見立てでは上手く動くはずなのだが、少しバルクホルンが緊張している気がする。

未熟な宮藤と、なぜか緊張しているバルクホルン。

その二人の相手として、美緒が選んだのがシャーリーとルツキー二のエレメントだった。

美緒も一目置くシャーリーとルツキー二の上手いコンビネーション。それを間近で見ること芳佳にとっては良い刺激になると思っていたのだが、一つ問題があった。

「その時にもなつて、リベリアンは木に登るのか」

「なんだよ。なんか不満があるのか？」

「不満はない。ただ呆れているだけだ」

バルクホルンとシャーリーとの決定的に悪い仲だった。

「ルツキー二。絶対あのお堅い軍人をペイント弾まみれにするぞ」

「できるものならやってみろ、リベリアン」

「シャーリー、ちよつと怖い・・・」

「バルクホルンさん、もつと仲良くしましょうよ」

ルツキー二と芳佳の仲介も虚しく、シャーリーとバルクホルンは距離を取って銃を構える。その様子に美緒は頭を掻いて眉を寄せた。

今回の訓練で美緒が学んだ事は、シャーリーとバルクホルンとの関係は今後の大きな課題の一つであるという事。そしてバルクホルンの緊張を消す最善の方法は頭に血が上らせる事だった。

「くっそ〜！負けたあ〜！」

「ぐちよぐちよ〜」

悲愴な声を出すのは、髪も服もズボンもピンク色に染められたシャーリーとルツキー二。

「ふん。当然の結果だな」

「あの、大丈夫ですかあ？」

逆に汚れ一つなく飛ぶのは芳佳とバルクホルン。美緒の予想を遥かに上回るエレメントだったようだ。

「シャーリーとルツキー二はそのまま風呂に直行しろ」

以前ペイント弾塗れのままルツキー二が基地内を走り回り、ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケの頭を悩ませたことがある。それを思い出し、美緒は忘れずに声をかけた。

「了解、少佐」

そうシャーリーが返事をする。そしてそれと同時に、シャーリーの持つブローニングM1918自動小銃はゆっくりとルツキー二へと向かい、引き金が引かれた。

まだ装填されていたペイント弾が連続してルツキー二へと向かい、突然の攻撃はルツキー二に全弾着弾した。

突然の発砲音に辺りは一斉に静まる。

そしてそれを最初に破ったのは、シャーリーだった。

「ほらほらルツキーニ。避けないともつとぐちよぐちよになるぞ」
「んじゅじゅ」。シャーリーもぐちよぐちよになっちゃえ」
そう言つてシャーリーとルツキーニはペイント弾で互いを打ち始めた。

「まったく、これだからリベリアンは」

そう呆れ声を出したバルクホルンの顔にペイント弾が直撃した。射撃方向を見れば、狙い撃ったのはシャーリー。

「こ、のおおおお!!!」

バルクホルンは顔を真っ赤にして自身もMG42を持って、おふざけ二人組の中に入つていった。

その様子を遠目に見ながら美緒は溜め息をついた。

下手に注意しても、どうせバルクホルンの二の舞だ。それに、どうせ後で風呂に入る。

結局、美緒は訓練後の遊び時間を黙認した。

02（後書き）

シャーリーの周りは、バルクホルンにルツキーニと騒がしいキャラが多くて書きやすいです

バルクホルンは多少自分の補正が強く出ているようです

サーニヤ・V・リトヴァクの夜は遅い。

「ふああああ」

いつも通りに夜間哨戒を終え、サーニヤは基地へと帰還した。

朝日がうつすらと見え始める時間。ゆつくりと魔女達が活動を始める時間に、サーニヤは一日の活動を終えるのだった。

眠い目を擦りながらハンガーにストライカーユニットとフリーガーハマーを置いて、サーニヤは欠伸交じりに自室へと戻っていく。

毎日毎日、朝起きるとなぜかエイラ・イルマタル・ユーティライネンの部屋にいる。

多分寝ぼけての毎朝部屋を間違えているのだろう。朝寝ぼけずにちやんと自分の部屋に帰ることがサーニヤの隠れた目標だった。

「ふあああああ」

一層大きな欠伸がサーニヤの口から溢れた。緩慢とした動作で基地内へと入っていく。

タンツ――

つと、その時乾いた音が基地に落ちた。

肩が熱い。

その熱さは一瞬の内に寝ぼけたサーニヤの頭を覚醒させ、熱さは激痛へと変わる。

ゆつくりと足から力が抜けていく。

冷たい感覚がサーニヤの頬を打った。そこでサーニヤは自分の体が倒れたことに気が付いた。

（誰？）

段々と狭まっていく視界。その中に二本の足が見えた。

その足捌きと長い銃身から、彼女が倒れたサーニヤを狙っている事が分かる。

（逃げ、なきや・・・）

思いはするがサーニヤの体は動いてくれない。肩の銃痕から血と共に力が抜け出ていったようだ。

体を動かせないサーニヤに、鋭い金属音が響いた。

「どうした！何があつた！」

勢いよくハンガーへと入ってきたのは、朝練中に銃声に気が付いた美緒だった。

「サーニヤ！何があつた？！」

美緒は倒れたサーニヤに一目散に駆け寄る。今の美緒には怪我をしたサーニヤしか見えてはいない。

サーニヤはその隙に逃げていく犯人の影を捉えながら、意識を失った。

03（後書き）

舞台を区切りたいので短めに更新
ここからようやく舞台がシリアスな方向に動き始めます

医務室には、四人のウィッチが集まっていた。

「サーニヤあゝ」

今にも泣きだしそうな声を出しながら、ずっとサーニヤの手を握り続けるのはエイラ。

「大丈夫よ、エイラ」

そんな泣き出しそうなエイラの肩に、サーニヤは優しく左手を置いた。右肩には真新しい包帯が巻かれ、痛々しい雰囲気を出している。

「サーニヤん。本当に大丈夫？」

サーニヤが横になっていいるベッドに顔を倒し、今にも寝そうな体勢なのは、エーリカ・ハルトマンだ。

「痛んだら、すぐに言ってくださいね」

「うん。芳佳ちゃん」

頷くサーニヤは疲れた様子で答えるが、その顔色は決して悪くない。何者かに撃たれたがすぐに美緒に助けられ芳佳に治癒魔法を受け、サーニヤの怪我は殆ど治っている様なものだ。

「みなさん。お茶煎れてきましたよ」

医務室の扉を開けて、両手でお盆を抱えて入ってくるのはリーネ。その後ろには、御茶菓子を持ったシャーリーとルッキーニ、ペリーヌ・クロステルマンの姿も見える。

「おっやつ、おっやつ！」

「うじゅ〜！」

シャーリーが抱えているリーネお手製のスコーンを、ルッキーニとエーリカが奪い合う。

芳佳とサーニヤはその賑やかな光景に笑みをこぼしていた。

そんな和気藹々とした光景の中、全てを破壊するように医務室の扉が開いた。

中に入ってきたのは、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ、美緒、

そしてバルクホルンだった。三人が三人とも眉を顰め、緊迫した雰囲気だ。

「サーニヤさん。本当に貴方を撃った人は見ていないんですね」

ミーナが神妙な面持ちで尋ねるのは、つい先ほどサーニヤに尋ねた質問だ。

「はい。分かりません」

真剣な声色に辺りは静まり返り、サーニヤも真剣な声で答えた。

「本当に、見ていないんですね」

その圧力ともいえる質問の仕方。その圧迫質問に耐えられなかったのはサーニヤではなかった。

「なんだ？！中佐はサーニヤを疑っているノカ？！」

エイラが立ち上がってミーナに猛講義をする。それにミーナは立ちあがってサーニヤから離れる。

「いいえ。サーニヤさんを疑っているという訳ではないわ」

ミーナの言い方はどこか含みのある言い方だ。

その真意を聞こうにも。ミーナはそれだけ言って黙りこくってしまった。

苦しそうな表情を浮かべ、何度も口を開きかけは閉じ、ようやくミーナは口を開いた。

「さきほど、坂本少佐とバルクホルン大尉と共に武器格納庫へ行つて、全ての弾薬の数を数えてきました」

そこでさらに言いくそうにミーナは顔を顰めた。

「ミーナ」

「大丈夫よ、美緒」

その力無い様子に美緒は気遣うが、ミーナはそれを拒否する。辛さと痛みを率先して抱えるのも指揮官として重要な役割の一つだった。結果、一発の弾丸がブレダS A F A T 1 2・7 m m機関銃から無くなっていました」

ミーナの告白に、ウツイチ全員の視線が一斉に一点に向く。

その理由が分からないのはただ一人、ブレダS A F A T 1 2・7 m

m機関銃の使い手であるルツキー二。

「何？わたし、やってないよ・・・」

たった一人の証言も、物的証拠の前では意味を成さない。

「フランチエスカ・ルツキー二さん。貴方に無期限の自室禁固を命じます」

「シャーリー。あたし、やってないよ・・・」

「分かってる、ルツキー二」

泣きだしたルツキー二をシャーリーは胸で抱き抱える。そのシャーリーの表情は、なんとも形容しがたい母親の顔だ。

「ミーナ中佐。あんまりです！」

「ルツキー二ちゃんが、サーニヤちゃんを撃つはずがありません！」
部屋を去ろうとするミーナに、リーネと芳佳が懸命に抗議する。同じ第501統合戦闘航空団に所属する魔女たちが互いを撃ちあうなんて、そんなこと絶対にあり得ない。

「ミーナ中佐。私を撃つたのはルツキー二ちゃんではありません」
サーニヤの必死の擁護にも、ミーナは何も答えずに医務室を去っていく。

「ミーナ中佐！中佐は本当に、本当に私たちがお互いを攻撃するなんて思っているんですか！？ミーナ中佐！」

芳佳は逃げるように医務室を出ていくミーナに追いつがる。しかしそれを美緒が止めた。

「坂本さんも、何か言ってください！」

声を荒げる芳佳の肩に、美緒は両手をおいて視線を合わせる。

「察しろ、宮藤」

それだけ言って美緒もミーナに続いて医務室を出て行った。

後には呆然と足を止めた芳佳が残されていた。

その様子を遠目に見ながら、バルクホルンは隣にいるエーリカに声をかけた。

「お前は何も言わないのだな、ハルトマン」

「そりゃあね、ミーナが仲間を見捨てるわけないし。何かめんどくさいことがあるんでしょ、トゥルーデ」

エーリカの言葉に、バルクホルンは神妙な面持ちで小さく頷いた。

医務室から出た直後、ミーナは美緒へと倒れ込んだ。

「よく頑張ったな、ミーナ」

隊長とはいえど、自らの仲間に関逆罪の容疑をかけるのは並大抵のことではない。

最後の芳佳やリーネの抗議にも、ミーナはよく耐えた。

「ええ。でも、休んでいる暇はないわ」

「またどこかの将校か」

顔に疲労を色を濃く浮かべているが、それでもミーナは休むことはしない。

ストライクウィッチーズの存在を否定する将校が目を光らせている今、ウィッチーズ隊内部で問題があれば何をされるかわからない。反逆罪という大罪を隊の中だけで処理をする。ミーナが今しなければいけないことはそれだった。

そのためには心を鬼にして、事態を悪化させないように、ルッキー二を隔離する。

非道と言われようと、それがミーナにできる最善の手立てだった。「ええ。だから、早く犯人を見つけないと」

ミーナだって決してルツキーニがサーニヤを撃つたなどとは思っていない。

疲労を隠せず、ミーナは指令室へと足早に戻っていった。

04（後書き）

反逆罪やらの軍規には明るくないので、間違っていたら指摘していただくのを助かります

今浮かんでいる全体像の中で、ここはかなり暗い場面になります
多分一番読むのがつらい部分がここだと思います

「ミーナ。ミーナ！」

美緒に肩を揺すられ、耳元で大声を出され、ミーナはつい今まで自分が寝ていたことに気が付いた。ここ最近寝る間も惜しんでルツキ―二の無罪を証明する証拠集めをしているおかげで、満足に寝ていない。通常業務中にも疲れが出始めたのだろう。

「ごめんなさい、美緒。何が――」

「ネウロイだ！」

美緒の言葉にミーナは寝ぼけていた頭を一気に覚醒させる。そこでようやく指令室にはスクランブルが鳴り響いていることに気が付いた。

「分かったわ。すぐに私が指揮を――」

「いい。ミーナは待機している」

指令室で寝てしまうほど疲労しているミーナを戦場に送りだす訳にはいかない。現場指揮は美緒が取ればいい。

美緒は立とうとするミーナを半ば無理矢理座らせる。

「ありがとう。助かるわ」

ミーナの言葉を受けて、美緒はハンガーへと走って行った。

スクランブルは基地内全体にも届いていた。

ミーナが寝ていた指令室にも、芳佳が食器を洗っていた厨房にも、バルクホルンが武器の手入れをしていた武器庫にも、ルツキ―二が禁固を命じられた個人部屋にも届いていた。

「ネウロイ！」

ルツキー二はスクランブルに跳び起きるが、そこが普段は眠ることのない自室であることに気が付いて、自分がまだ禁固中だということと思い出した。

「じゃ、わたしは行かないと」

そう言つて一緒に部屋の中で待機していたシャーリーは立ち上がった。軍規に触れるかもしれないのだが、ミーナは見て見ぬ振りをしておいてくれたのだ。

しかし有事の際になつても、ミーナに甘えている訳にはいかない。シャーリーは、ルツキー二の頭に手をポンと乗せて髪を掻き乱し、「んじゃ、行つてくるな」

そう言つて笑顔でシャーリーは部屋を出て戦場へと駆けて行つた。

「シャーリー。気を付けてね」

いつもなら自分も戦場に出てシャーリーを守れることもできるのに。しかしそれができないと知ると、途端に仲間たちのことが心配になる。

「大丈夫かな、シャーリー」

一人残された部屋で、仲間が危機になつても助けることができずにただ待つしかない。その寂しさにルツキー二の目から涙が零れそうになる。

そんなルツキー二の前で、小さく扉が開いた。

見えるのは、黄色と茶色の入り混じつた髪。

「これ忘れものね」

声と共にポンと通信用のインカムを放り投げて再び扉が閉まつた。

ルツキー二は突然のプレゼントに驚くが、ゆっくりと歩み寄りインカムを耳に付ける。

左耳だけのインカムから聞こえるのは、司令部を通す魔女たちの通信だった。

「おいハルトマン。インカムの片方どうした？」

「さあ？無くしたかも」

右耳だけにインカムを取りつけた状態でエーリカは答えた。

「おい、行くぞ。バルクホルン、ハルトマン」

美緒の声にバルクホルンとエーリカは無駄口を辞めて舞い上がった。ネウロイ迎撃に出撃するのは、美緒を隊長としてバルクホルン、エーリカ、シャーリー、ペリーヌ、リーネ。

まだ本調子ではないサーニャと、代わりに夜間哨戒を引き受けているエイラ、疲労しているミーナと、救護要員の芳佳、禁固中のルツキー二は基地待機だ。

上空に舞い上がった六人のウィッチは、そのまま遠くに見えるネウロイへ向けて飛ぶ。

ネウロイの大きさはかなり大きく、直径二十メートルほどの円盤型。その見た目からも分かりやすい様に動きはかなり遅い。

「核は、奴の体内の様だ」

美緒が眼帯をずらし、その魔眼でネウロイを見る。ネウロイが弱点とする核、それはネウロイの硬い皮膜で守られているようだ。

「行くぞ！」

美緒の掛け声とともに、ウィッチーズはネウロイへと向けて突撃した。

遠距離からリーネのボーズMk・I対装甲ライフルが火を吹く。

魔力で強化された弾丸は白煙を挙げてネウロイに着弾した。

その攻撃でようやくネウロイはウィッチ達に気が付いたのか、体を光らせレーザーを放つ。

赤色のレーザーの雨をくぐりながら、シャーリーとバルクホルンはネウロイに向けて小銃を撃つ。動きの遅いネウロイに次々と着弾し、着実にネウロイの体を削り取っていく。

「硬いな」

弾丸は着実にネウロイへダメージを与えていくが決定打にはならない。リーネの対装甲ライフルですらネウロイの体が凹む程度。硬度と大きさに手をあぐねているのがバルクホルンの正直な感想だった。

「どいて〜。シュトルム！」

渋る顔のシャーリーとバルクホルンに声をかけ、エーリカが体を旋回させながら突撃した。

風を操り自らを竜巻と化すエーリカの固有魔法。小型のネウロイなら一瞬で殲滅させる威力でエーリカはネウロイへ突っ込んでいく。しかし後に響いたのは竜巻がネウロイを切り裂く音ではなく、日ごろでも行く痛ましい音だった。

「痛ったああああああ！！！！！」

エーリカはゴロゴロと頭を押さえて空中を転がる。その頭にできたのは特大のたんこぶだった。

シュトルムでの攻撃を狙って突撃したはいいが、ネウロイには傷一つ付いていない。風での掘削を失ったエーリカはそのままの勢いでネウロイへと衝突したのだった。

「ついてこい、ペリーヌ」

「はいですわ」

エーリカのシュトルムは効かない。通常为重火器では決定打不足となれば残る手は美緒しかない。

ペリーヌに援護射撃をしてもらいながら美緒がネウロイへと突撃する。

その手に扶桑刀を持ち、飛行の加速も加えてネウロイへと向かう。

「烈風斬！」

魔力を込めた渾身の一撃。並みのネウロイは一刀の元に斬り伏せる攻撃だが、美緒の手に走ったのは硬質な感覚の腕の痺れだった。

「くう！」

美緒の烈風斬ですら大型ネウロイへの決定打とならない。

「どうする？坂本少佐」

悩む美緒にエーリカが飛び寄ってくる。ネウロイとの戦いは劣勢でなかなか難しい。瞬間的な火力が必要だ。

「そうだな、核に目掛けて一斉に――」

そこまで言った美緒は、突然の光景に口を止めて眼を見開いた。

すぐ真横にいたエーリカの肩から、突然血が噴き出したのだ。

ネウロイのレーザーでないことは確か。それに何より、血の噴き出す方向から見ればエーリカが攻撃を受けたのは背後から。そして美緒とエーリカが何も知られずに背後を取られるはずはない。

となれば一体何があったのか。

疑問に思った美緒は、即座に背後を振りかえった。

そこに見えるのは、白い煙を吐き出すBAR。

シャーロット・E・イエーガーが銃を撃ち放ったその態勢のままで静止していた。

05（後書き）

下手するとタイトルでばれていたのではないかと冷や汗。
黒鬼ってそのまんまなので、
ここでもうやくストーリーの折り返し地点です

『一体どういうことだ！シャーリー！』

『大丈夫ですか？ハルトマンさん』

『理由を言え、シャーリー！』

美緒の詰問。リーネの心配。バルクホルンの激昂。

三者三様の言葉がたった一人の魔女を指す。

とても優しく、いつでも側にいてくれた、自分が一番一緒に居たい相手。

気付けば、ルッキーニは部屋を飛び出していた。

「理由を言え、シャーリー！」

美緒の問いにシャーリーは顔を挙げた。

「違う！あたしじゃない！」

シャーリーは突然否定の言葉を放つが、その言葉に反して銃口はバルクホルンを向く。

「何が違うだ！まず銃口を降ろせ！」

バルクホルンの激昂にシャーリーは引き金を引いて答えた。突然の攻撃にも、先にエーリカが撃たれたこともある。バルクホルンの前にシールドが張られ銃弾を弾いた。

「シャーリーさん、いったいどういうことですか？」

「だから、あたしじゃないんだって」

ペリーヌの言葉にも、シャーリーは必死に否定する。しかし言葉とは裏腹にシャーリーの銃口は魔女たちを狙う。

「この！言うことを聞け！」

一人で滑稽な演技をしているようにしか見えない光景。だがシャーリーは真剣そのものであり、その真剣な瞳に美緒はシャーリーの体に異常を見つけた。

肘のあたりまで真っ黒に染まった右手。硬質的な光沢は、よく見る色艶だ。

「少佐。ちよつと右手見てくれないか？」

「あ、ああ」

拳動不審なシャーリーの動きに、美緒は言われた通りに魔眼でシャーリーの右手を見た。

魔眼を通すとシャーリーの右腕が紫に染まっていることが分かる。

それが示す意味は、美緒が予想していたものと全く同じで、

「ネウロイか」

おそらく、今までには見たことのなかった感染型のネウロイ。効果は、他人の体を支配すること。

「やつぱりか」

呟くシャーリーには、ネウロイを体内に潜ませる心当たりはある。

前に噛まれた真っ黒な蛇。あの蛇がネウロイの一部だったのだろう。体内にネウロイが侵入し、時間が経つにつれて活性化したのだろう。

「このつ、止まれえ！」

シャーリーは熱心に右手を自分の支配下を置こうとするが、一度体に入ったネウロイはシャーリーの魔力を無尽蔵に喰い散らかして支配を強めていく。少しづつ右手が黒に浸食されていくのが分かる。

ほとんど右手は力を強めていき、銃口はペリーヌを向かれる。引き金だけは引かまいと右手に力を込める。

しかし代わりに、ネウロイはシャーリーの体を操った。

「うわっ！」

勝手に体が動き、シャーリーはバルクホルンへと体当たりをかました。その衝撃でバルクホルンとシャーリーは一瞬怯み、右腕が引き金を引いた。

狙いも何もない無茶苦茶な掃射。普段のウィッチーズならものとも

しないのだが、怪我人を一人抱え、動揺している今それは十分に脅威となる。

「やめろ！止まれええええ！！」

シャーリーの言葉も虚しく、銃弾がやたらめったら放たれる。銃弾はシールドによって弾かれるが、それでもウィッチ達の気を引くには十分すぎる。

そして敵はシャーリーだけではなかった。

シャーリーの背後から放たれる無数のレーザー。シャーリーを操る大型ネウロイが放つレーザーの雨は、動揺したウィッチを窮地に陥れる。

「くっ！」

ただ攻撃を弾くだけの完全な劣勢。まだ血の止まらないエーリカがいる事を考えても、この事態はあまりにもマズイ。

「このおおおおおおおつつっ！！」

ひと際大きな気合の声が響いた。残った魔力をあらかじめ使い、シャーリーは何とかネウロイから右腕の主導権を奪いとる。

といっても右腕が自由に動かせるレベルではなく、暴走する右腕を止めることが精一杯。

その僅かな静止に、シャーリーは強く決意した。

「坂本少佐！頼みがある！」

大声で口に出さないとすぐに揺らいでしまいそうな精神。だからあえてシャーリーは怒鳴る様に叫んで自分を奮い立たせる。

「この右腕、切ってくれ！」

このままではシャーリーの右腕が原因でウィッチーズは全滅する。だからシャーリーは強く決断する。

一切言う事を聞かない自分の体と、自分のウィッチとしての生命。それよりも、それよりも遥かに大切なのは、今まで一緒に生活してきたウィッチーズたち。

自分の右腕一本で魔女の命が変えるなら安いものだ。

そのシャーリーの決断に辺りが静まり返った。

「……分かった」

暗く落ち窪んだ言葉で、美緒はシャーリーの意思を肯定した。

「そんな、坂本少佐！」

リーネは仲間を介錯しようとする坂本に声を荒げる。心優しい少女には、心優しすぎる少女は残虐にシャーリーの心を折ろうとする。

「黙れ！」

それを恫喝で止めたのはバルクホルンだった。

「アイツの意思に、水を差さないでくれ……」
顔を伏せ、涙を流すバルクホルン。

最も仲の良い戦友を撃たれ、最も仲の悪い好敵手が自害を望み、それでもバルクホルンは涙していた。エーリカが撃たれたことへの怒りも簡単に吹き飛び、バルクホルンはシャーリーが開ける大きな穴を感じ、涙していた。

そのバルクホルンの機微に触れ、リーネは口を閉ざして俯いた。

「ありがとな、バルクホルン……」

にっこりと痩せ我慢をしながらも、シャーリーは痛々しくも笑顔を
見せる。

せめてバルクホルンの痛みが少しでも和らぐように。

「それじゃ、頼むよ。少佐」

シャーリーの言葉に、烈風丸を涙で濡らし、美緒は鋭利な介錯刀を振り上げた。

「だめええええええええええ！！！！！」

扶桑刀を振り上げた美緒に甲高い声がかかり、その背中が突き飛ばされた。

続いて美緒とシャーリーの間に割って入る、青と白の縞々ズボンと黒豹の耳。

「シャーリーの手、切るなんて絶対だめっ！」

「ルツキー二・・・」

乱入してきたのは、顔を涙でぐしゃぐしゃにしたルツキー二だった。
「行こっ、シャーリー」

そう言つてルツキー二は、躊躇わずにシャーリーの右手を取った。

ネウロイに浸食され、いつ暴走するか分からない右手。ルツキー二もそれは聞いているはずだ。

しかしそれでもルツキー二はシャーリーの右手を取った。

その行為で、全てが分かった気がする。

「ごめん。やっぱあたし、ルツキー二と逝くわ」

痛ましい笑顔をちらつかせ、シャーリーはルツキー二に手をひかれ、眼下に広がる森の中へと急降下していった。

06（後書き）

泣いた黒豹と黒兎

この話でちょうど折り返し地点くらいです

予定として次は、シャッキー二の出番はなしで、残されたメンバーにスポットを浴びせます

暗く重い部屋の空気。

通信回線越しの将校の視線が痛い。

「ミーナ中佐。貴方は事の重大さを本当に気が付いているのですか？」

ただ嫌味を垂らすだけの将校の言葉。たった十一人の魔女たちだけで、艦隊全々と匹敵する戦闘力と発言力を持つウィッチーズが妬ましいのだろつ。

散々な文句は、今まで何度も何度もあつたことだ。

「一人のウィッチの反逆と、一人のウィッチの逃走。何を言われても文句は言えませんな」

いつもの嫌がらせなら耐えられる。ただミーナが気にしているのは、たったひとつの命令だった。

「二人のウィッチの内、ネウロイに寄生されたシャーロット・E・イエーガー大尉」

将校の命令は予想がつく。おそらく最もミーナが危惧し、最も精神に負荷をかけ、最もを苦しめる命令。

「現時刻を持つて彼女をネウロイと断定。第501統合戦闘航空団に彼女の撃墜を命じる」

通信室の外で美緒は烈風丸を片手に胡坐をかいていた。

ウィッチーズを敵対視する将校がミーナにどんな言葉をかけるかは予想がついている。

だからこそ、美緒はミーナと共に通信に相席したいのだが、ミーナ

はそれを断った。彼女としても部下と共に将校から愚痴の相手にされるのは嫌なのだろう。

ミーナの心中も察し、結果として美緒がとった行動は通信室の前でミーナを待つことだった。

うつすらと美緒の耳に通信の声が聞こえる。しかしその話声の途中で何かが倒れる音を捉えた。

「ミーナ！」

一体何があったのか。美緒は即座に通信室の扉を開けて中へ飛び込んだ。

そこで見たのは、床に倒れるミーナの姿。

「まったく、この程度の覚悟もなく一人前の戦士とはな」

無様なミーナの様子を見て将校は鼻で笑う。そんな将校の前から一刻も早くミーナを引き離すために、美緒はミーナを肩に担ぐ。

「それでは、シャーロット・E・イエーガー大尉の撃墜の結果、楽しみにしているよ」

その絶望の一言に、美緒も表情を変える。ショックな事実を意識が飛びそうになるが何とか耐える。

悲愴と絶望を一面に広げたその顔を見せないように、美緒はゆっくりとミーナを部屋の外へと運び出した。

その哀れな敗走を見て、将校は満足げに下卑た笑いを浮かべて通信を切った。

何とか部屋の外へと出た美緒は、ミーナを廊下に寝かせて思いっきり壁を叩いた。

「くそっ！」

自らの仲間を、自らの手で撃墜する。その未来を目の前に付きつけられて、美緒は顔をゆがめた。

「ふう・・・」

「大丈夫？ 芳佳ちゃん」

夜遅く、月明かりが照らす廊下に芳佳は一息つきに医務室から外へ出た。

そこで待っていたのは、疲労する芳佳を労うために夜更かししていたリーネだ。

「はい、これ」

リーネから差し出されたホットココアを受け取り一口飲む。疲れた体には心地いい。

「ありがと、リーネちゃん」

わざわざ遅くまで待っていてくれたリーネに芳佳は感謝の言葉を伝える。

ココアを飲んで落ち着いたことで、芳佳はリーネがそわそわとしていることに気が付いた。

「それで芳佳ちゃん。ハルトマンさんは？」

リーネが尋ねるのは、つい先ほどまで芳佳が診ていた負傷兵のことだ。右肩を弾丸が貫通したのが幸いで、怪我はそこまで酷くはない。「大丈夫だよ。すぐには飛べないと思うけど」

完治までは、芳佳の治療を目一杯入れて一週間。サーニヤにも同じ治療を行っているのが苦しい所だ。

「芳佳ちゃんも、ちゃんとゆっくり休んでね」

現在501で一番魔力を使っているのは二人のウィッチの治療を行っている芳佳だ。

「うん」

強く頷いて、それでも芳佳はまた医務室へと戻っていった。

「さて、どうしたものか」

同時刻。夜遅くなくても、バルクホルンはハンガーにいた。

あの強力堅固なネウロイを攻略する術。それを探するためにバルクホルンは夜遅くまでハンガーに残っていた。

あのネウロイと実際に戦った感触は、かなり不可解なものだ。

実弾は効いたが、シュトルムと烈風丸は完全に弾いた。その境界線は曖昧だ。

「一体なんなんだ、あのネウロイ？」

こういう時呟くと、大体はエーリカが口を挟んできてヒントになったりするのだが、エーリカが被弾した今それは望めない。

「実弾は通して、刃は通さない。となればやはり大火力が欲しいのだが」

501の中で一番火力が見込めるサーニヤはまだ戦闘は不可能だ。

となれば、バルクホルンがどうにかするしかないのだが、それでもネウロイの硬い表皮を貫ける自信はない。

「どうしたものか、」

バルクホルンは頭を悩ませるが、凝り固まった頭はいつもよりも遙かに回転しない。

空回りする思考で、疑問はどんどん肥大化していく。

それが、いつも擲いがてらに喧嘩する彼女がいなかったためとは、バルクホルンは気がつかなかった。

蒼月の照らす闇の中。

鬱蒼と生い茂る林の中で、葉と枝と泥を髪に付けたシャーリーが座っていた。

今にでも暴走しそうな右腕を抑えるために魔力を解放し続け、既にシャーリーの疲労は限界に達していた。

「はあ・・・はあ・・・」

今ここにルツキー二はいない。疲れたシャーリーを休ませるために、森の中を走り回って食料と飲み水を探してきているのだ。

そんな心優しいルツキー二を心いとおしく想う。だから、彼女にこそ今の彼女の苦しみを見せたくない。

「くあっ！」

右手に走る激痛にシャーリーは呻き声を挙げた。ウィッチーズの前から逃げ出したときは、肘までだったネウロイの浸食は既にシャーリーの右肩にまで来ている。

長袖の上着のお陰で何とかルツキー二には気付かれてないが、そんなごまかしもどこまで続くか。

騙し騙しでルツキー二と一緒にいることはいつまでできるのか。

「シャーリー！水あったよ！」

蚊や蛭すらも隠れているであろう茂みの中からルツキー二が飛び出してきた。その手には、おそらく水が入ってあるであろう水筒。その両膝には泥が付いている。

シャーリーに水を渡すために、それこそ山すら越えたのかもしれない。

「ありがとな、ルツキー二」

ボロボロになりながらも水を探してくれたルツキー二。その彼女を心配させないように、シャーリーは痛みをこらえて笑顔で答えた。

ルツキー二から水を受け取り、シャーリーは喉を潤す。疲労困憊の

体にはただの水ですら極上だ。

ゴクゴクと喉を鳴らして水を飲む。その時月明りで、ルツキー二の腹部に傷があることに気が付いた。

「ルツキー二、その傷何だ？」

「んじゅ？これ？」

そう言つてルツキー二は自分の腹部を指さす。以前シャーリーが受けたものと同じ蛇の噛み傷。思えば、あの真つ黒な蛇がネウロイの一部だったのだろう。

しかし、それでも、ネウロイに噛まれたルツキー二がシャーリーと同じようにネウロイに感染していないことが不思議だ。

「寝てたら噛まれたみたい。痛くないし放つておいだんだけど・・・」

「
そのルツキー二の表情は随分と暗い。」

「あたし、死んじやうのかな・・・」

蛇に噛まれ、その傷口を治療したシャーリーでもネウロイに浸食された。蛇にかまれ、傷口を治療しなかったルツキー二がどうなるかは見当がつかない。

シャーリーという今にも死にそうな魔女を前に、いつもは明るい二人もさすがに重苦しい雰囲気になる。

「死にたく、ないな・・・」

ルツキー二の言葉はシャーリーも同じだ。こんな楽しくて仲間に恵まれた日々を終わらせたくはない。

「シャーリーはさ、自分が死ぬこと考えたことある？」

ふらつと口に出したルツキー二の言葉は、軍人であり戦場に身を置くものなら一度は考えたことのあるものだ。それでも最終的にその質問は、考えないようにしている。

「あんま考えない。つまんないし」

死ぬことなんか考えてもどんどん暗く重たくなっていくだけだ。そんな考えはシャーリーの性に合わない。

「うん。そつだよね」

そう言つてルツキー二は顔を上げて、目を輝かせた。問題事を後回しにして、楽しいことだけを考える。それがいつものルツキー二とシャーリーだった。

いつものようにくだらない事を言いあつて、笑いあう。

新しく買ったクツシヨンの寝心地が良いとか、次のバイクの試運転にどこに行くとか、軍人の一人がウィッチを見ながらコソコソしていたとか、食糧庫に扶桑のものらしい真緑のジュースがあつたとか。そんな下らない話で盛り上がった。

どんな苦境においても笑いあう。それがルツキー二とシャーリーの強さと言えた。

そんな幸せな時間も、永遠には続かない。

そしてそれは突然始まつた。

笑つていた、幸せだった、だから気を抜いていた。

突然シャーリーの右手が動いた。気を抜いていたことと、時間共に浸食していくネウロイ。いつの間にかの時間経過が、シャーリーの魔力の限界を越えていた。

「かはっ」

シャーリーの右手は不意打ちの様にルツキー二へと走る。奇襲に何も抵抗できず、シャーリーの右手は力強くルツキー二の首を掴んだ。
「ルツキー二！」

シャーリーは懸命に魔力を送り、ネウロイから支配権を奪い取ろうとする。しかし浸食の進んだネウロイの力は強力で、シャーリーの魔力を受け付けないどころか、シャーリーの魔力すら吸収してさらに浸食を進める。

「があっ……っ……」

「このっ！止まれえええ！」

シャーリーの気合も虚しくルツキー二の首から腕は外れない。その間もネウロイはシャーリーの腕を黒く染めていき、既に首筋まで黒い。

「シャー、リー……」

首を締められたままで、ルツキー二は何とか声を出す。首を絞められたためにいつもと違う掠れた声だ。

「あたし、シャーリーになら、殺されてもいいよ……」

死ぬのは嫌だった。でも、それがシャーリーのためにシャーリーの手でなら我慢できる。いつ死ぬのか分からないのなら、大好きな人の手の中で死にたかった。

黒豹の魔女は、目から涙を流し、それでもとびっきりの笑顔で最期の言葉を告げた。

その笑顔を見て、その痛々しくも美しい笑顔を見て、シャーリーの目は悲愴に染まった。

何も言わずに、自分の腰からBARを引き抜く。銃口の先は自分の、ルツキー二を絞める右腕。

「このっ！このおおお！！」

完全なゼロ距離で、シャーリーは自分の右手に発砲した。

「千切れるっ！千切れるおおおおっつっ！！」

繰り返し繰り返し、シャーリーは自分の右腕目掛けて引き金を引く。あんな、悲愴で痛々しいルツキー二の顔を見て、シャーリーはそんな顔をさせた事を後悔する。

あんな不幸せそうな笑顔。そんな想いはルツキー二には絶対にさせたくないし、そんな想いをルツキー二の最後にしたくない。

そこまでの思いをさせるなら、自分の右腕を吹き飛ばした方が何千倍もマシだ。

しかし現実は無情だった。

「止まれ！止まれ！止まれええ！！」

連続される銃弾は、真っ黒に染まったネウロイの硬い表皮に弾かれる。ゼロ距離で銃弾を撃つてもシャーリーの腕は傷一つ付かない。

それでも、無駄と知りながらもシャーリーはひたすら足掻く。

ネウロイの浸食はさらに加速。シャーリーの右目にネウロイが混じり込み、右目が白濁し、少しずつ黒く染まっていく。

「あっ……っ……」

ルツキー二の体がビクンと震えた。それと同時に薬莢の排出が止まる。弾切れだ。

それでもシャーリーは最後まで悪足掻きを止めない。涙交じりに、グリップで自らの腕を殴りつける。しかしそれも意味をなさない。

「っ……」

ルツキー二の口からはだらしなく涎が垂れ、ビクビクと体が震える。「このっ！止まれ！止まれえ！」

いつの間にかシャーリーの白濁した瞳からも涙が流れていた。その涙を込めた一撃もネウロイの右腕には答えない。シャーリーはもつと強く自分の右腕を苛めるために、BARの銃身を掴んだ。熱の籠った銃身はシャーリーの左手の肉を焼くが、それでもシャーリーは止まらない。

「……」

ルツキー二は首を絞められた体勢で小刻み震えだした。もう限界は間近だ。それでもシャーリーはまだネウロイを止める手立てすらない。むしろ、ネウロイがさらに浸食を始めシャーリーもに右目は黒に染まり、使い魔による兎耳の半分黒い。

「止まれええええ！」

最後の、ルツキー二が死ぬまでへの最後の一撃。銃弾であろうとも傷のつかない右腕には、あまりにも絶望的すぎた一撃だった。

「っ痛！」

ただその最後の一撃にシャーリーは呻いた。鈍い音と鈍い痛み。ただその一撃にシャーリーの右腕はルツキー二の首から手を離れた。

「っ……がはっ、げほっ」

ルツキー二が地面へと落ち、むせる。荒い呼吸と酷い咳はルツキー二が生きている証だ。

「ルツキー二！」

倒れたルツキー二にシャーリーは駆け寄ろうとするが、その足は止

まった。またルツキー二に攻撃したら、その思いがシャーリーの足を止める。

「シャー、リー、」

苦しそうな顔でルツキー二はシャーリーの右手を指さした。それでシャーリーは自身の右腕がひとまず自由に動くことに気が付いた。とりあえずは、ルツキー二を襲うことはなさそうだ。

「ねえ、シャーリー、これ・・・何？」

自身の右腕が自由に動く理由。それを調べようとシャーリーは近づいてきたルツキー二と自身の右腕を見た。

ネウロイによつて浸食された右腕。その浸食の一部が凹み、どうやらシャーリーの右腕を操っていただけではなく、腕にネウロイが張り付く様に広がっていたらしい。

凹んだ所から、シャーリーの右腕が見える。

「なあ、これって・・・」

ただし、生身の右腕は真っ黒に染まっていた。

「いいのね、トゥルーデ、美緒」

「ああ」

ハンガー。ストライカーを穿いた魔女たちは、ネウロイ迎撃のために集まっていた。

ただ、今回の任務は相手がネウロイだけとは限らない。ネウロイに操られた魔女すらも戦う可能性がある。

そのため隊を三つに分けていた。

一つは、ミーナ、エイラ、ペリーヌ、リーネのネウロイ攻撃部隊。

一つは、エーリカ、サーニヤ、芳佳の怪我・魔力枯渇による待機部隊。

そして最後の一つがバルクホルン、美緒のシャーリー迎撃部隊だった。

「シャーリーは私が落とす。その覚悟は、ある」

ウィッチの中で最も苦しい役回りを取った二人。この二人は自ら進んで臨み出たものだった。

美緒は、自らに介錯を頼んだ部下のために。既に自分が分からないほどネウロイに浸食されているのなら、シャーリーを落とすのは頼まれた美緒の仕事だった。

バルクホルンは、自らの最大の好敵手のために。シャーリーを落とすのなら無粋な方法ではなく、最後の言葉を交わして自らの手で落とすのはバルクホルンの仕事だった。

共に最高の仲間を華々しく送ってやるために、二人は辛い役回りに自ら名乗りを上げた。

「行くぞ」

物々しく告げて、美緒は空へと飛び立った。

その美緒の服装は普段の白い軍服ではなく、厳かな黒の上着。そしてバルクホルンの胸には月桂樹の葉。

今日、親しい戦友を殺す。追悼の、喪服の航空団だった。

蒼く澄んだ、雲一つない空。その中に真つ黒な影が見える。

円盤型の直径20m程のネウロイ。以前交戦したネウロイの姿そのままだ。

「いた」

ネウロイと少し距離を置いてミーナが空中で手を上げ、ネウロイを指す。

「ストライクウィッチーズ、出撃！」

ミーナの掛け声とともにウィッチーズは機線を残してネウロイへと向けて突撃した。

しかし、ネウロイへとは飛ばないウィッチが二人。

「来ると思っていたよ」

空中で静止する美緒とバルクホルンの前には、BARを持ち片耳を黒く染め右目を白濁させたシャーリーの姿。

その変わり果てた姿にバルクホルンは息をのんだ。もはやシャーリ

ーは、今まで見知ったウィッチではない。

「気を付けるバルクホルン。人を真似るネウロイの例もある」

美緒が言うのは以前芳佳が出会ったウィッチもどきのネウロイのことだろう。シャーリーというウィッチに寄生し浸食した今、人語を解することぐらいは予測しておくべきだろう。

「大丈夫だ、少佐」

シャーリーを殺す覚悟。シャーリーだったものを殺す覚悟は十分にできている。

バルクホルンはMG131を強く握り直した。この銃で、シャーリーだった物を撃墜する。しかしその覚悟を潰すようにシャーリーは

口を開いた。

「なあ、少し聞いてくれ」

普段のシャーリーの声とは異なる、引き攣る様な掠れた声。しかし、僅かに残るシャーリーの口調と声質がバルクホルンを揺さぶる。

「どうやら――」

「黙れっ！」

シャーリーの声をバルクホルンが遮って怒鳴った。もうシャーリーではないということは分かっている。かけてくる声はバルクホルンを動揺させるためのものだ。

頭の中ではそう理解していても、シャーリーの言葉はバルクホルンの決意を揺さぶるには十分すぎる。だから叫ぶように言葉を遮る。もう話すな。その声を聞かせるな。それ以上わたしの心を侵すな。それがバルクホルンの願いだった。

「坂本少佐」

叫び、僅かに冷静になった頭でバルクホルンは静かに声をかける。

「あ、ああ」

怒りを込めた熱い感情を抑え込み、僅かに冷静に見えるバルクホルンに美緒は何とか声を返す。冷静に見えてもその下にある爆弾ははつきりと分かる。シャーリーと対峙しただけでバルクホルンの精神は限界だ。

「行くぞ。シャーリーを撃墜する」

どこか壊れてしまったかのように、バルクホルンは静かにシャーリーへと突撃した。

「ヒマだねえーサーニャン」

エーリカは医務室のベッドの上で、同じようにベッドに横たわるサ

「ニーヤに声をかけた。」

確かにヒマであることには分かるが、それでも仲間たちは現在交戦中。ハルトマンの様にだらけることはサーニヤとしては気が引ける。「だって音だけじゃツマンないんだもん」

「音だけ、ですか？」

エーリカの愚痴に、サーニヤが反応する。見ればエーリカの耳には通信用のインカムが取り付けられている。

「ハルトマンさん、それ」

「サーニヤさんも聞く？」

エーリカの耳に届くのは、遠くで行われるネウロイとの戦いの様子。といっても聞こえるのはミーナの指示やペリーヌの返答であつたりと、大して面白くもない。

ツマンナそうにインカムを外そうとしたエーリカの耳に、全く別の通信回線が乱入してきた。

「ん？なに？」

通信回線に耳を傾け、エーリカは二言三言言葉を交わす。

「ううん、知らない。えっ？消毒液？」

「ハルトマンさん、なんですかその通信？」

医務室に入ってきた芳佳は、突然の単語に首をかしげた。

エーリカはその声で、部屋に芳佳が入っていたことに気付き、芳佳へと振り返った。

「おお、ミヤフジ。消毒液つてある」

「消毒液ですか？それならここに」

手慣れた様子で芳佳は棚から消毒液を取り出す。家庭用の小型容器ではなく、軍事施設用の大瓶入りのものだ。

「あつたよ。それで、それで」

エーリカはまたインカムで顔も知らない誰かと会話する。

「ハルトマンさん、何話してるんだらうね？」

「さあ？なんだろう」

コソコソと会話を続けるエーリカを横目に芳佳とサーニヤは仲良さ

そうに話す。

しかし、エーリカの口から放たれた不穏な言葉にその和やかな雰囲気は簡単に壊れる。

「え？なに？少佐の部屋に侵入？やる。絶対やる。面白そう」

ベッドから顔を上げたエーリカの顔は、いつもの悪戯好きの瞳がキラキラと輝いていた。

バルクホルンはシャーリーの背中にピタリと張り付く。

「わっ！とっ、」

背中から掃射。しかしシャーリーはそれを器用に避けていく。

「ちょ、やめろ。バルクホルン」

「黙れ！その声で喋るな」

僅かにシャーリーらしさを残しただけの全く異なった声。

シャーリーを真似するネウロイのその行為だけは絶対に許せない。

バルクホルンは、その憎き相手にシャーリーへの恨みをただひたすらにぶつける。

「避けるな！」

ヒョイヒョイと避けていくネウロイを一喝し、バルクホルンはMG131の引き金を引く。

その猛攻にネウロイは避ける以外の術はない。

時折ネウロイはBARを向けるが、バルクホルンの銃撃を前に引き金を引く前に体を反転して逃げに徹する。

攻撃に転じることができず、ただ逃げるだけ。撃墜も時間の問題だろう。

「少佐。挟み撃ちを」

「あ、ああ」

またネウロイがバルクホルンから銃口を外して逃げに走る。

そのネウロイに全てをぶつける様な姿勢を遠くに見ていた美緒はバルクホルンの声に動き始めた。

あまりに苛烈で捨て身に近いバルクホルンの性格は熟知しているつもりだったが、今日はあまりにも無鉄砲すぎる。

確かに頭に血が上る理由も分かるが、あまりにも危険だ。

少し不安なバルクホルンを止めるために、美緒は急いでネウロイへと飛んだ。

が、

「ダメ！少佐」

ネウロイに近づこうとした美緒に立ちはだかる様に現れたのはルツキーニ。

黒豹の魔女が両手を大きく広げ、美緒を遮る様に立ちはだかった。

「ルツキーニ・・・」

ルツキーニが美緒の前に立ちはだかる理由はよく分かる。最も仲の良かったシャーリーがネウロイになったとはいえ、シャーリーの姿を残して撃墜されるのは見たくないに決まっている。

しかし、それでも、シャーリーの姿のままでネウロイとして人を殺していく方がむごい事実であるということをルツキーニはまだ知らない。

「どけっ！ルツキーニ！」

「やだっ！」

恫喝する美緒。それにルツキーニも一步も引かない。目に涙をためながらも、ルツキーニの目には強い光が見える。

多少の恫喝だけでルツキーニはここを引かないだろう。

しかしルツキーニを退けない限り、シャーリーの撃墜は冷静を欠いたバルクホルン一人に任せることになる。

それだけは、あまりに危険だ。今にも折れてしまいそうなバルクホルンを一人にすることはあまりに危険だ。

そう判断し、美緒はスラッと烈風丸を抜いてルツキーニに突きつけ

る。

「どけ、ルツキーニ！」

「ヤダっ！」

武器を持たないルツキーニはそれでも美緒の前に立ちほだかり続ける。

目には涙をため、それでも強い瞳は美緒から外さない。

「お願いだから、まだシャーリーを殺さないで。話、聞いて……」

「

力をなくしたルツキーニの言葉に烈風丸の剣先が下がる。

もう美緒にルツキーニとの交戦の意思はない。

こういう所がまだ甘いのだろう。自分のことを冷静に分析しながら、美緒はルツキーニの顔を両手で挟んだ。

僅かに、肉の焦げる匂いがした。

「避けるな！大人しく消えろ！」

自暴自棄なバルクホルンの声が辺りに響く。

シャーリーの振りをするネウロイ。アレを撃墜することしか、バルクホルンの頭の中にはなかった。

挟み打ちをする算段だった美緒も依然として合流する様子を見せない。

全く合流しようとしないうちに美緒に怒りバルクホルンが視線を移すと、その先には眼帯をしまふ美緒と付き従う様なルツキー二の姿があった。

「なるほど、そう言うことか」

納得した風に美緒が頷き、腕を組む。烈風丸は鞘にしまい、既に交戦の意思はない。

戦意を喪失したらしい美緒。上官の意外な姿勢にバルクホルンは意表を突かれ、氣をとられていた。

そのため、目の前に迫ってきたシャーリーに気が付いてきた時は既に遅かった。

バルクホルンの眼前を支配するシャーリーの姿。互いに向き合う様に高速で飛ぶ二人の距離は見る間に縮まっていく。

回避はできないし、防御も間に合わない。

交差の攻撃の衝撃にバルクホルンは身を構えた。

バチーンッ

つと、鋭利な痛みがバルクホルンの顔に走った。

「なっ、何をする?!」

怒鳴るシャーリーの顔に付いているのは、真つ赤な平手の跡。

「そんな頭硬くするなっ、カールスラント」

「お前がお気楽過ぎるんだ！リベリアン！」

そいつものように叫んで、バルクホルンは気が付いた。

いつもと変わらない、無駄口を叩いてお気楽で自堕落なりベリアン。ずっと喧嘩していたから分かる、間違いなく本物だという実感。

「お前、まさか・・・」

「何言ってるんだ？だから頭が硬すぎるっていつも言ってるだろ。バルクホルン」

いつものように、シャーリーはからかう様な笑顔でバルクホルンに答えた。

美緒の私室は少し異色を放っていた。

石壁であることは他の魔女たちの部屋と同じなのだが、部屋の一角には畳が敷かれ賭け軸が掛けられている。

「少佐、けっこう凝ってるね・・・」

畳、日本刀、掛け軸と言い、ここまで扶桑テイストにエーリカは少し驚いていた。

独特な空気に気押されながらもエーリカはずかしくと侵入していく。こういう事態でないと間違いなく許されない。だからエーリカは興味津々で部屋の中を物色する。

「おっ、あつたあつた・・・」

そう言つてエーリカは部屋の一角に恭しく置いてある、大切そうにしているソレを手を取った。

「ルッキーニも成長したな」

自信の持てる最高速で美緒は空を駆けていた。

「そうか？」

美緒の言葉にバルクホルンが答えた。共に最高速の超速の世界。ただ直線で飛ぶだけであり、最高速であつてもバルクホルンと美緒には余裕があつた。

「これだけの舞台装置を組むとはな。ここまで物事を考えられるとは思つてなかつた」

ルツキー二には悪いが、本能的に動いてその場しのぎで動いているだけと思つていた。ここまで他人が動く事を考えることができると思つてなかつた。

「まだ私には全体像が見えないんだが」

シャーリーと交わした簡単な言葉ではまだ要領を得ない。それでも美緒が絶賛するほどだから、かなりの事なのだろう。

「そうか。驚くぞ、これをルツキー二が考えたらと知ったら」

嬉しそうに美緒は微笑を浮かべた。

「はぁ・・・はぁ・・・」

硬質な弾丸を弾くネウロイ。その相手にミーナ達は苦戦を強いられていた。

「つと、危ないナ」

飛んでくる無数のレーザーをエイラは難なく回避した。

レーザーを回避することはさほど難しくはない。しかし、相手にも全く決定打が入らないマラソンマッチは厳しい。

まだエイラは大丈夫な方だ。問題は、ルツキー二の擁護の時から満足に寝ていないミーナだ。

繰り返されるレーザーの猛攻。その一撃を受けてミーナがよろめい

た。

「大丈夫ですか、ミーナ中佐」

倒れそうになるミーナにすかさずリーネが支える。既にミーナが限界を迎えていることはリーネにも分かっている。

「ありがとうございます」

答えるミーナは既に呼吸が荒い。マラソンマッチの終わりも近いのだろう。

「リーネさん。すぐに配置に戻ってください！」

リーネが抜けた穴をペリーヌが懸命に埋めるが長くは持ちそうもない。

すぐさまリーネは配置に戻ろうとしたが時すでに遅かった。

ネウロイはレーザーを撃ち放つのをやめ、何かを吐き出すように体を盛り上げた。

口のようにネウロイの甲殻に丸い穴が空き、嘔吐するようにネウロイが黒を吐き出した。

見ればそれは真っ黒な蛇の束。

その膨大な量の蛇は、純粋な物量を持ってウィッチ達に襲いかかった。

すぐさま強固なシールドが張られる。しかし、疲労していたミーナは一瞬遅れた。

「ミーナ中佐！」

シールドの内側へと一匹の蛇が入り込んだ。ミーナはすぐさま狙いを付けて引き金を引くが、蛇はネウロイと同じく銃弾を弾く。

蛇はなんなくミーナの体を這いまわり、腕に噛みついた。

「痛っ」

痛みに声を上げてミーナは体勢を崩した。落下しそうになる所を魔力を飛べて体勢を立て直そうとする。

「飛ぶなっ！」

突然の怒声。

咄嗟の指示に従ってミーナは魔力を抜く。体は自由落下していくが、

それはすぐさま誰かの腕の中に落ちる。

「シャーリーさん・・・」

「まだ飛ぶなよ。すぐに毒が抜ける」

そう言ったのは真つ黒な耳を持ち、片目を白濁させたシャーリー。声も掠れ、外見は明らかにいつもと違うのだが、中身には変化した様子はない。

「シャーリーさん。どういうこと？」

ミーナがシャーリーの上での中で問いかけると、シャーリーはいつもの碎けた口調で答える。

「ネウロイの感染は魔力がないと出来ないらしくてな。噛まれても魔力を使わなければ感染はしない」

ネウロイに噛まれてもシャーリーは感染し、ルツキーニは感染しなかった。その差は間違いなく芳佳による治療の有無だ。芳佳の治療魔法で外部からネウロイを活性化させることがシャーリーの感染のきっかけだったのだろう。飛行を止めてルツキーニと森の中で休んでいた時は感染の進みが遅かったことも、ネウロイが魔力で活性化していることを裏付ける。

シャーリーの考えは、今ミーナがネウロイに噛まれても感染していない事からも間違いなく正しかったと分かる。

「それと、分かったことがもう一つ」

正しい光彩を放つ左目だけを凜々しく細めるシャーリーに無数の蛇が襲いかかった。

「ペリーヌ、雷撃！」

「ト、トネール！」

突然のシャーリーの指示にもかかわらず、ペリーヌは何とか雷撃を発生させた。

銃弾を放つても決して倒れることのなかった蛇はその雷撃に触れただけで焼け落ちた。

「このネウロイは熱に弱い」

烈風丸もシュトルムも効かなかったのは、それが熱を持った攻撃で

はないからだ。だが、トネールの様な強大な熱量を持った攻撃ならば容易にネウロイを傷つけることができる。それが、ルツキー二を守るために咄嗟に放熱前の機銃で自らの腕を殴った時に気が付いた事実だった。

「でも、そんな燃料兵器なんて」

ネウロイが熱に弱いのは分かる。しかし熱量兵器と言った特殊兵装は今手元にはない。基地内にもあったかどうか。

「大丈夫。全部用意してある」

そうシャーリーが告げた瞬間、硝子の割れる音が響いた。

その正体は見知ったもの。医務室に山積みでおいてある大瓶入りの消毒用アルコールだ。

「宮藤からの餞別だ」

美緒が投げるのは、消毒用アルコールに料理用の調理酒。全て強大な熱源となるアルコールだ。

「ナイスだ少佐」

シャーリーが親指を立てて美緒へ合図をする。しかしその瞬間シャーリーの右手が狂ったように痙攣を始めた。ネウロイの浸食だ。

「シャーリー！」「ルツキー二！」

二人の声が重なった。

直後シャーリーは急速度で飛んできたルツキー二の手を取る。

シャーリーの手を掴んだ瞬間ルツキー二の頭と尻から使い魔の片鱗が姿を見せる。

それと同時に肉が焦げる匂い。

腕に走る痛みにはシャーリーは顔を歪ませる。しかし、その痛みと引き換えにシャーリーはネウロイの支配から逃れる。

ルツキー二の持つ固有魔法。熱操作による場当たりの治療だが、今この場を凌ぐには十分すぎる。

「ありがとな。ルツキー二」

「うん。シャーリー」

二人は手を繋いだまま離さずに言葉を交わす。

彼女たち二人を繋いでいるのは手だけではない。もっと、もっと深い所で彼女たちは繋がっている。

その美しい光景に美緒は顔を喜びに曲げた。

「これは私からの餞別だ」

そう言つて美緒がネウロイに投げたのは、美緒が大切に保管していた上質な扶桑酒。なぜかエーリカが手渡してきたものだが、なぜだか今は惜しいという気にはならない。

瓶が割れて中から芳醇な香りを放つ蒸留酒がネウロイにかかる。

そしてそれを貫く様に銃弾が放たれネウロイは炎上した。

「全く人使いが荒いな、リベリアンは」

美緒に僅かに遅れて現れたバルクホルンは、先程装備は一新されている。わざわざ一度基地に戻り装備を変えてきたのだ。

「悪いな、バルクホルン」

「別に悪いとは言つてない」

あつけらかんとするシャーリーに、満更でもないバルクホルン。結局この二人の関係も、ネウロイに取りつかれ外見が分かったとしても変わることはなかった。

「さつさとやるぞ、リベリアン」

そう言つてバルクホルンは両手に持つMK108を乱雑に放った。

次々と掃射される無数の弾丸。炎上して脆くなっているネウロイが耐えられる弾幕の雨ではない。

あれだけ硬かったネウロイが、簡単に崩れていく。

「すごい・・・」

リーネは嘆息の声を上げるが、それだけで終わりではない。バルクホルンは撃ち尽くしたMK108の銃身を逆に持ち、その怪力を持つてネウロイを叩きつぶした。

シャーリーがルツキーニを助けるために使った銃身の熱。その高熱によってネウロイはバルクホルンによって簡単に凌辱される。

バルクホルンの持つ圧倒的な火力。たった一人だけの戦力でネウロイはすでに陥落寸前だった。

たまらずネウロイは抵抗に出る。体を大きく膨らませ、また無数の蛇を吐き出した。

「バルクホルン！」

そのフオローに入るのは美緒の持つ火炎瓶。ネウロイの蛇はバルクホルンを覆う前に容易に焼き払われた。

しかし、バルクホルンが作った僅かな隙にネウロイは急速離脱を開始した。

見た目とは裏腹に最高速は早く、ネウロイとの距離はぐんぐんと伸びていく。

「まずい。みんな追って！」

あのネウロイはシャーリーを支配していることは確実。となればあのネウロイを逃がすことはそのままシャーリーが解放されないこと、さらには確実な撃墜宣告につながる。

「バルクホルン！」

ミーナの声にいち早く察したのはシャーリーだった。

シャーリーの加速ならネウロイを追うことができるが、シャーリー一人ではどうしても火力が足りない。そこまでシャーリーが考えたのは、別の作戦。

その考えを読み取り、バルクホルンはシャーリーの腕を取った。

反対側のシャーリーの腕にしがみつくのはルツキーニ。

ルツキーニとバルクホルンでシャーリーの両手を掴んで挟みこんでいる形だ。

「よし。やれバルクホルン」

「おお！」

そう言つてバルクホルンはシャーリーとルツキーニを抱えて回転し始めた。

怪力を持つて強引に二人を砲丸投げの様に旋回させる。

「いっけえええルツキーニイイ！」

回転の速度が最高潮に達した瞬間。シャーリーは加速の魔法をかけてルツキーニを放り投げた。

「たああああつつ!!」

ルツキー二のシールドが摩擦によって真っ赤に染まる。音速に近い超高速でルツキー二は正確にネウロイへと迫る。

僅かにでも三人の息が揃わなければ、三人のうち一人でも失敗すれば、ルツキー二は明後日の方向に飛んで行ってしまう。しかしルツキー二にはこの作戦が失敗することは到底考えられなかった。

「いけええええ!!!!」

シャーリーとバルクホルンの声が重なる。

その瞬間ルツキー二は固有魔法を使った熱の盾を展開させ、ネウロイの核を叩き割った。

「シャーリー!」

「ルツキー二!」

真っ白のネウロイの雪。その下でシャーリーとルツキー二は歓喜に抱き合った。

シャーリーの耳は元通りの白に戻り、右目も正常に光を取り入れている。右手はまだ僅かに黒く染まっているが、それが高熱による炭化によるものだということは二人とも十分に熟知している。

「良かったわ。シャーリーさん」

「そうだな」

疲労したミーナの顔もどこか安らいだように見えるのは気のせいではないだろう。

美緒はその優しいミーナの顔に、口元を緩め、残った扶桑酒を一口呷った。勤務中ではあるが、こんな時くらいは許されるだろう。

「おっ、少佐良い物飲んでんじゃない」

右手を引き攣らせながらも、シャーリーは元氣そうに美緒へ近づく。美緒の腰には使われなかったアルコール類がまだ少し残っている。

「まったく。これだからお気楽なリベリア——」

そう言い終わる前にバルクホルンの顔にビールがかけられた。その先には意地悪そうな笑みを浮かべるシャーリー。

「この・・・シャ——」

「あたしもやるー!!」

怒り出す前にバルクホルンの口にビールが直撃した。今度のビールの持ち主はルツキーニ。

「この、貴様らああ!!!!」

怒りながらも楽しそうに、バルクホルンはルツキーニとシャーリーへと飛んで行った。

散々にバルクホルンにかけられるビールがカールスラント製であったことは、二人なりの感謝なのだろう。

そんなことを思いながらバルクホルンは笑顔で、お気楽な二人組を追いまわした。

「はあ・・・疲れた疲れた・・・」

「んじゅ」

ネウロイを倒し、ビールかけを愉しみ、シャーリーとルツキー二はベトベトになった服で基地へと帰ってきた。

一晩外で夜を明かしたこともあり、ビールが匂い始めたこともあり、早く風呂に入りたい。

シャーリーは切実に思いながらストライカーを置きにハンガーへと降り立った。

そこで、周りの雰囲気がいっしょとは大きく異なることに気が付いた。ピリピリと緊迫した、シャーリーを敵視し排他しようとする空気。その正体はすぐに分かった。

シャーリーの目前に現れたのは、よく知っているウィッチーズ反対派の将校。

「シャーロット・E・イエーガー大尉。そしてフランチエスカ・ルツキー二少尉だな」

その声にあるのは冷酷な事務的な言葉。二人の返答も待たずに将校は冷徹に言葉を重ねた。

「フランチエスカ・ルツキー二少尉は禁固刑からの逃亡の罪により隊除名処分。シャーロット・E・イエーガー大尉は反逆罪により銃殺刑を課す」

ネウロイ撃退から一週間。

今日は、シャーロット・E・イエーガー大尉の銃殺刑決行日だった。

「なにか言い残すことはあるかね？」

「いいや、あたしからは何も」

将校の声にシャーリーは簡素に答えた。基地内の人の立ち寄らない一角。基地内では今まで使われたことのない懲罰室の中、シャーリーと将校は二人きりだった。

シャーリーの銃殺刑には、ウィッチーズからは誰も同席しない。

「君を慕っていた少尉にないのかね？」

「ああ」

ルッキートは一週間の禁固の間に随分と話しこんだ。もう当分話したいことはないだろう。

「ただ、ミーナ中佐はなんかあるみたいけどな」

そうシャーリーがいた瞬間、扉が開いてミーナが入ってきた。

「何かね？ミーナ中佐」

将校の声は絶対的優位を確信した余裕に満ちたものだ。しかし対するミーナも不安げな様子はない。

「いえ、少しお尋ねしたいことがあって」

わざとゆつくりと話すミーナに、将校は苛立ち始める。

「なにかな？私としては早く銃殺など終わらしてしまいたいのだが」早くシャーリーを殺してしまいたい。そんな負の感情を隠すことなく将校は言葉を放つ。

「いえ、本当に将校自らの手で銃殺を行うのが不思議で」

ミーナに言葉に将校は手を止めた。その顔には僅かに焦りが見える。

「何か、非公式な内々の内に処理したい様子で」

「な、何を言っている?!」

ミーナの突然の不躰な質問に、将校は怒りを露わにした。

「そうでした。将校はこの人物に見覚えは?」

怒り出す将校を無視してミーナは話を変える。もうペースは完全にミーナのものだ。

ミーナが取り出したのは一枚の顔写真。軍の資料の一部で、簡単に手に入るものだ。

「それは、私の部下だが」

嘘を言ってもすぐにばれることだ。ミーナのことだから確信があつて質問をしているのだろう。

「実はこの人物が先日、501基地に非公式に訪れていたと私の部下が証言しまして」

もちろんミーナが言う部下はルッキーニのことだ。ルッキーニが見たウィッチを見ながらコソコソしていた軍人。一週間かけてルッキーニに面通しさせた成果だ。

「何かを隠すようにコソコソと動いていたと私の部下は証言しています」

「だ、だから何だというんだ?!」

将校はミーナの回りくどい、外堀を埋める様な口調に激昂する。しかしミーナはそれほどのものでは揺るがない。

「先日将校の部隊は、一週間前に撃墜したネウロイと交戦していたそうですね。記録に残っています」

強烈なミーナの指摘。既に将校は言葉を発する権利すら持たない。

「大火力を持つ将校の艦隊ならあのネウロイを撃墜できないはずがありませんよね。あのネウロイは艦隊の様な熱兵器にこそ弱いのですから」

あのネウロイもサーニャのフリーガーハマーがあれば容易に撃墜で

きただろう。同系統のミサイル兵器を持つ艦隊がネウロイを撃退できないわけがない。

「ひよつとしてその時、ネウロイの体から排出された蛇に気が付いたのではありませんか？ 気付き、持ち帰り、501基地に放したのではありませんか？」

そのミーナの指摘に、将校はついに銃を取り落とした。全て凶星だったようだ。

ネウロイと交戦し、その時にたまたまウィッチを掻き乱すであろう蛇を手に入れ、ウィッチ達と接触させる。そしてそれによって生じた不祥事を糾弾し、ウィッチーズの立場を崩壊させる。

おそらく将校の狙いはそんな所で、今回はそれが殊更上手くはまった結果なのだろう。

しかし、それもミーナには全て暴かれていた。

「内々に処理したいというのは私も同じです。今回の事後処理を私に譲り、今後基地内への無断侵入を控えていただければ私としても特に思うことはありませんわ」

捲し立てる様にミーナは将校を糾弾する。一週間、積み重ねに積み重ねたミーナの努力の結果であり、それによって将校はついに崩れ落ちた。

トボトボと、将校が肩を落として基地の外へと出ていくのが見える。それとは逆にシャーリーとミーナが伸びをして基地から将校を送りだした。

もうシャーリーは無罪放免なのだろう。

幸せそうな顔に、ルッキーニは満足してクッションに体重をかけた。暖かな日差しが辺りを照らし、穏やかに風が流れる。

葉が奏でる歌は心地よく、ぽかぽかとした温度は睡魔を呼ぶ。
柔らかなクッションはそれだけで幸せを生み出し、フランチエスカ・
ルツキーニは太い幹の上で寝息を立て始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2191q/>

STRIKE WITCHES ~ 泣いた黒豹、黒兎 ~

2011年5月14日09時40分発行